



女子校三年。ブランクが大きすぎた。もう卒業して1年が経つ。でも未だ分からない。「恋」ってなんですか。中学生の私はおぼろげにも捉え、恋に恋することできたのに。今の私の中の恋のイメージは、最近読んだ「春の雪」とか、少女マンガだとか...そんな想いが日常から浮遊するような「恋」は未だ訪れず。むしろそんなフィクションの大層な恋なんて一生かかっても無理にしか思えない。

そんなことをぐるぐる考えているけれども、私はいわゆる彼氏のいる、傍から見は普通の女子大生である。彼のこと、どうも思わないの、と聞かれても実は全く困らない。彼のことは慕っている。ただ、友達から始まりそのままなんとなく付き合い始めたから、私はそれを「恋」とは呼びたくない。なんだか私たちは双子みたいだ、と思う。熱く燃える想いとか、片思いの甘酸っぱさ。私はそれが欲しい。彼のことは愛している。ずっと昔から一緒にいたみたいなの信頼がある。だけど、悲しいかな、彼に恋しているかは分からない。

私たちは学校で、街で、頻繁に連れ立って行動してきた。顔を合わせるなら毎日。その彼が、二週間ほど実家に帰ることになった。付き合ってからそんなに離れるのは初めてである。最初は自分の自由時間が増えていいかな、なんて思っていた。私は先の楽しさを急いで、人との別れを惜しむ感覚がずれている。小学校の友人が都合で遠方の他県の中学校に行くになったときも、友達が泣くのを見ながら手紙をやり取りするのも楽しいかな、なんて考えてしまうくらい。

彼が帰る前日、なんだか二人で大げさに今日は最後の日だからと、ずっと一緒にいた。夜、彼は私の部屋に泊まった。別に、ただ二人で私が買った雑誌を読んで語らうだけ。色っぽいことは私たちの間には存在しない。そんなものはまだ早くて、笑いに変えてしまう。

「帰らないでよ。」

冗談めかして、ここ数日言ってきた言葉なのに、その日はなぜだか急に涙が溢れ出た。彼も同じように泣いていた。私はたったの二週間で泣くのはおかしい、と頭の片隅では思っていたのに。涙は止まらなかった。次の日は、見送りにはいかなかった。本当に涙を堪えるのに必死だった。頑張っって涙を目に、口は笑って玄関でさよならした。一度うたたねしても、起きたら涙がまた出てきた。百メートルの距離が百キロになったことがすごく現実的。夕方のバイトの時にも、ふと気を抜くと涙が出そうになった。たった二週間。頭では分かっているけど、身体が言うことを聞かない。涙は身体の声か。私は頭ではうじゃうじゃ恋がなんだとか考えていた。けれども、なんだ、身体は知らぬ間に彼に恋していたのか。

頭なんて偉くない。自分の本当の気持ちを霞ませてしまうお馬鹿さんだ。私が二人の関係を恋と認めていなかったことを知らない彼。ごめんね。今すぐ伝えたいことがあるのだ。

「私は確かにあなたに恋してしまっていた。」